

ルーマニア語の数詞

Numeralul limbii române

倍賞和子
Kazuko BAISHO

1. ルーマニア語の基数

ルーマニア語の基数1から20までと、それ以上の数の内、数構成の理解に役立つ例を幾つか示す。

- | | |
|------------------------|---|
| 1. unu (un)
una (o) | 11. unsprezece |
| 2. doi
două | 12. doisprezece
douăsprezece |
| 3. trei | 13. treisprezece |
| 4. patru | 14. paisprezece |
| 5. cinci | 15. cincisprezece |
| 6. șase | 16. șaisprezece |
| 7. șapte | 17. șaptesprezece |
| 8. opt | 18. optsprezece |
| 9. nouă | 19. nouăsprezece |
| 10. zece | |
| 20. douăzeci | 21. douăzeci și unu (una) |
| 30. treizeci | 32. treizeci și doi (două) |
| 40. patruzeci | 43. patruzeci și trei |
| 50. cincizeci | 54. cincizeci și patru |
| 60. șaizeci | 65. șaizeci și cinci |
| 100. o sută | |
| 106. o sută șase | 178. o sută șaptezeci și opt |
| 200. două sute | |
| 209. două sute nouă | 264. două sute șaizeci și patru |
| 1000. o mie | |
| 1003. o mie trei | 1529. o mie cinci sute douăzeci și nouă |
| 2000. două mii | |
| 100万 un milion | |
| 200万 două milioane | |
| 10億 un miliard | |

20億 două miliarde

留意点

- 1, 2, 12には男性形と女性形がある。
- 1には名詞としての働きをする unu, una と形容詞の働きをする un, o, があり, 下のような格変化をする。

	男性形		女性形	
N.	unu	un	una	o
G. (al)	unuia	unui	(al) uneia	unei
D.	unuia	unui	uneia	unei
A.	unu	un	una	o

3. zeci の後に接続詞 și を付ける。

話し言葉では douășunu, șaptezeci のように発音されることがある。日本語でも35を「サンゴ」のように発音することがあるように。

また話し言葉では“și”が mie の後に置かれたり, 省略されたりすることもある。

4. 20以上は数えられるものである名詞の前に直接置かず de を挟む。

trei case, cinci studenți, zece zile, douăsprezece luni,
optsprezece fete だが, douăzeci de băieți, o sută de cărți

数えられるものが20以上の数詞(形態論的には名詞)の場合も同様である。

cincizeci de mii patru sute treizeci și doi de oameni = 50432

treizeci și cinci de milioane patru sute douăzeci și șase de mii șapte sute optzeci și nouă = 35,426,789

商人の話等でこの“de”が省略されることがあるが正しい用法とにみられない。

2. 現代ルーマニア語の数詞の特徴

1. 発音を容易にするための変形(異形態素)

14, 15, 16の4, 5, 6は patru, cinci, șase と2音節に発音せず, pai-, cin-, șai- と1音節になる。12に男性形, 女性形の別があるのに, 11には unasprezece を使用しないのも同様の理由からと考えられる。

2. 分析的十進法の体系

算盤や数学の計算のときに, 日本語の数が整然とした十進法からできあがっていることの有難さを感じるものだが, ルーマニア語の数も1から19までと, “și”を除き, 日本語の数に似ている。フランス語やスペイン語などロマンス語の多くが20, 30, ~90をラテン語から引き継いで, 総合的な形で表現し, また英語も two ten, three ten とは言わず別の総合形を持っているのに対し, ルーマニア語は分析的で, 下の式のように百が幾つあり, 十が幾つあり, それが加えられているというように, 数の内容がそのまま表現されるのである。

(一桁の数) × 1,000 + (一桁の数) × 100 + (一桁の数) × 10 + (一桁の数)

trei	mii	cinci	sute	patru-zece și șase
三	千	五	百	四十と六

11から19は日本語のように zece unu, zece doi, ~zece nouă とは言わないが, 英語のように11, 12, と

それ以上、フランス語のように11から16までと17以上、スペイン語のように11から15までと16以上、またラテン語のように18、19が20からの引算という形で表現され17までとは異なる数構成となっているなど、複数の表現法をとる言語が多いことを考えると、ルーマニアの数がいかに規則的であるか分かるであろう。

3. 数詞の名詞的性質

1). *zece, sută, mie* は女性名詞として、*milion, miliard* は中性名詞として複数形を取る。また、*zece* を除いて単数は不定冠詞をとる。

douăzeci (ただし *o zece* とは言わず、*zece*)

o sută două sute, o mie două mii,

un milion două milioane, un miliard două miliarde

2). 20以上の数詞は、数えられる名詞の前に直接置かず、*de* を挟む。

このことについては、数構成の留意点のところを例を挙げて述べたが、これは数詞が形容詞でなく名詞として使われることを示している。

3. ルーマニア語の数詞の歴史的、比較言語学的特徴

1. 11から19までの数構成の歴史的考察

ルーマニア語では11から19までは一桁の数 + *spre + zece* という構成になっている。現在のルーマニア語ではこの *spre* は「～の方へ」という意味なので、この数を初めて知った時、学習者はいささか混乱するものである。この構成法は長くスラブ語の影響と言われてきた (*v. sl. jedinū na dešete = 11, dūva na dešete = 12*)。しかし、アルバニア語 (*një-mbë-dhjetë = 11*)、アルメニア語 (*evten ev tasn = 17*) やバルト諸語にも見られることから、各語に独立に現れたか、基層語のやり方にラテン語の数を当てはめたと考える方が妥当である。その理由としてスラブ語からの借用語が多く入る9世紀以後にルーマニア語がこの方法を取り入れたとするには次の理由で無理があるからである。9世紀以後は *spre* は「上」という意味でなく現在の「～の方へ」と言う意味だけで使われるからである。(Academia, I. Fischer) つまり、11、12の語源は

unsprezece < lat. *unus super decem = 10の上の1*

doisprezece < lat. *duo super decem = 10の上の2*

と素直に考えればよいのである。この *super decem* は、10まで数えることを知った人々が、刻み目を10個つけて数えた上にさらに重ねて刻み目をつけて数えたことに由来するという説が説得性をもって来るのである。

なお、ア・ルーマニア語では20から29までもこの方法が使われる。

11 = *unsprăvingiț*, 12 = *doisprăvingiț*

2. 20から90まで

viginti < uiginti は共通ルーマニア語にはあったが、ダコ、イストロ・ルーマニア語では消失した。また *triginta* から *nonaginta* までどのルーマニア語にもない。その代わりに *douăzeci* のような構成はスラブ語の影響とも考えられるが (*dūva dešeti = 20, trie dešeti = 30*)、アルバニア語 (*tridhjetë = 30, nëndëdjetë = 90*) でも同様の構成がみられるので基層語の構成法かもしれない。

3. “și” の使用

英語では *..hundred and* のように百の後に *and* を置くが、ルーマニア語では上に述べたように、十の後

に *și* がつく。これは古代スラブ語に見られる。(șaizeci și trei = șestă deșetu i trie) また、アルバニア語では接続詞 *e = “și”* がそれぞれの要素の後に現れる。(njëzet e dy = douăzeci și doi, njëqint e tre = o sută și trei, dy mijë e një quint e katër = două mii și o sută și patru, një mijë e nënt quint e shtatëdhjetë e tre = o mie nouă sute și șaptezeci și trei)。また、この接続詞を入れる数構成法は俗ラテン語でも用いられていた (decem et octo, septem et decem, septem ac decem, tres et decem 等 Gr. Brâncuș) という。なお古代ギリシヤ語やドイツ語にも同じように接続詞を用いる数構成法がある。つまり、接続詞を用いることは普遍的な現象であるが、特に基層語の影響もあってパルカンのロマンス語である共通ルーマニア語に定着したと考えられるであろう。(ア・ルーマニア語では *tsintsi nîl'i șă tsintsi stue șă optu di ańi = cinci mii și cinci sute și opt de ani*)

4. *de* の使用

ダコ・ルーマニア語で 20 以上の数が名詞を修飾する場合 *de* を挟むことは上に述べた通りであるが、(ア・ルーマニア語では 11 以上)、これは 50 以上に属格を使用した古代スラブ語の影響かと言われてきた。(dăua deseti, tri deseti, četyre deseti だが *peti desetă, șesă desetă*) Gh. Bolocan によると、11世紀以後ブルガリア語でこの数詞+属格の属格の代わりに前置詞 *otŭ* が用いられるようになったということである。もしこの現象がスラブ語の影響であるとすれば、11世紀以降におこったと考えられる。

5. *sută* の語源

ダコ・ルーマニア語ばかりでなくア・ルーマニア語、メグレノ・ルーマニアでも百を表すの *sută* を使用している。これは、古代スラブ後の *sŭto* に近いが、アクセントのないイェリ = ь が母音に変化する例はこれ以外にないので、音声的に多少無理がある。Al. Rosetti によると、もしこれがスラブ語からの借用であるとするならば借用の時期は非常に古くなければならない (Al. Rosetti ML)。ルーマニア語だけどうしてラテン語の *centum* を引き継がないでスラブ語から *sută* を借用したのかと言うことについては *centum* > *cintu* と *lat. quinque* > *cinci* という同音語 (*lat. centum* > *arom. cint*, 複数形は *șințâ*, *lat. quinque* > *șinț*) を避けて *sută* を取り入れたと言う説もある。(Ministerul Educației · · の *Istoria limbii române*)

Rosetti はまた、数に関しては外国語起源の語が既にある数体系に入る事は珍しくないとして、日本語や韓国、朝鮮語が中国語から、アフリカ諸語がアラビア語から数を入れたり、また、フィンランド語が印欧語から百を取り入れた例を挙げている。

6. *mie*

mie < *lat. milia* であることは異論がない。16世紀には複数形に *mie* と *mii* の両方が用いられていた。*cinci mie* (CT, Matei, 58; Marcu, 25), *cinci mii* (CC, 295, 297)

7. 万以上

16世紀に一万を表すのに “*untunearec*” が使用されていたという。これは現在の *întuneric* で「暗黒、闇」を意味する。当時は万というのは具体的な数ではなく何か分からない大きなまとまりであったのであろう。*milion* や *miliard* はフランス語からの借用である。

4. まとめ

以上見てきたように、ルーマニア語の数詞は構成要素はラテン語起源であるが (*sută* を除く)、構成法には基層語の特徴を残している。また、周囲の言語からも便利なものは取り入れ、分析的な、十進法の方へ

独自の発達を遂げた。その結果他のロマンス語の数組織とはいろいろと違う特徴を持つに至った。これは比較言語学的に非常に興味あることである。また、十進法が確立した現在、他言語の要素を使って分析的な十進法を作り上げた日本語の話し手として、ルーマニア語の数組織は非常に分かり易く、親近感が持てるものである。数の概念や数組織の発達の歴史という面からみても、重要な事例であろう。

参考文献

1. Academia Republicii Române: Istoria limbii române (1965)
2. Al. Rosetti: Istoria limbii române (Editura pentru Literatură 1968)
3. Ministerul Educației și Invățămîntului: Istoria limbii române (Editura Didactică și Pedagogică București 1978)
4. J. Jordan, V. Guțu-Romalo, Al. Niculescu: Structura morfologică a limbii române contemporane (Editura Științifică 1967)
5. I. Fischer: Latina dunăreană (Editura Științifică și Enciclopedică 1985)
6. Academia Republicii Socialiste România: Gramatica limbii române 1966)
7. Al. Toța: Elemente de morfologie (Editura Științifică și Enciclopedică 1983)
8. Gh. Bolocan: Observații asupra originii numeralelor românești (LR, XVIII, 1969, 2)
9. Gr. Brâncuș: Originea structurii numeralului românesc (SCL, XXIV, 1973, 5)